

浅草が魔性の華やかさを見せた頃

志茂田景樹



旧国鉄職員だった父や、母は浅草のことをよく話していた。

母は父と婚約した年に伊豆から上京して深川の技芸学校に学んだ。和洋裁と料理を教える花嫁修業の学校で、寄宿舎に入った。休日には寄宿生仲間と浅草六区に繰り出し、活動写真を観た。浅草の十二階、という通称で知られた浅雲閣の展望階にも何度か上がって、「あそこで売っていたおはぎは美味しかったねえ」と、目を細めたことがあった。

その浅雲閣は大正12年の関東大震災で倒壊したが、本所で母も被災し寄宿生仲間と火の海を逃げ惑い九死に一生を得た。しかし、多くの寄宿生が命を落とした。そのときの母は火の海をようやく脱すると、着

の身着のまま被災者の群れに紛れて伊豆を目指した。酒匂川の対岸へ渡ったところで、被災者の群れに母の姿を探し求めていた小田原居住の父と劇的な再会を果たした。

その翌年に父と母は結婚し、昭和14年までを東京の小岩にあった鉄道官舎で過ごした。この頃、休日には伊豆から出てきた祖母に僕の兄や、姉たちの世話を託し、母は官舎の主婦仲間と浅草へ出かけた。まだ僕が生まれる前のことで、当時の主婦にとって活動写真(映画)は最高の娯楽だった。僕が中学生の頃、母が僕に当時の浅草の賑わいを懐かしそうに話し出したことがある。途中でどこからか数枚のブロマイドを出してきて、「ほら、これが林長次郎、こつちがバンツマよ。どつ

ちも凄い二枚目でしょ」と、自分の恋人のように自慢した。

林長次郎は後の長谷川一夫、バンツマは阪東妻三郎の愛称である。母の話だと、小岩の官舎時代の後半は、いっとき東武沿線に工事畑の職員だった父の現場があった。父はよく浅草で飲んでは深夜に円タクで帰宅したものだという。一度酔ってへべれけになった踊り子を連れて帰り、泊めてやってくれ、と母に言った。

学生時代、たまに浅草に出かけて仲見世や、六区をぶらついた。父や母が歩いたであろう道を歩くだけで、当時の浅草の活気が伝わってきた。あるとき、友人に「染太郎」というお好み焼き屋へ連れて行かれた。高見順の「如何なる星の下に」に

も登場する店だと知っていたから、胸を躍らせながらのれんをくぐった。

金網で保護されたところに、作家や、芸人の色紙や、短冊や、ハガキ、手紙類が展示されていた。空襲で焼けたことがあるのに、戦前のものもかなりあったと記憶している。それから何年か経って、父と酒を飲む機会があり、染太郎の話を出すと、父は表情を輝かせた。「おお、そこへ行ったのか。父さんはな、戦前に7、8回は行ってるよ」

そのとき、今度一緒に行くとういうことになった。いくらか行く機会があったのに実現せぬままに、それから十数年後、父は逝ってしまった。浅草が魔性の華やかさを見せていた時代を知る父は、それを僕に語るのを惜しんだのかもしれない。

昭和12年、その時日本は…

昭和12年と言えば盧溝橋事件。7月7日、中国北京郊外の盧溝橋付近で夜間演習中の日本軍に対して発砲事件があり、これをきっかけに中国軍を攻撃します。日本は停戦協定に調印し不拡大方針を唱えながらも兵を送ります。蒋介石の国民政府も抗日運動の高まりから出兵。日中戦争へと突入していきました。

を気遣い、渡航を躊躇していた彼女をサリヴァン自身が促したといえます。サリヴァンは前年に亡くなりませんが、ヘレンは精力的に日本中を講演して回り、多くの人々を励ましました。

4月9日、東京朝日新聞の飛行機・神風号がロンドンの空港に到着。1万5千キロの距離を94時間17分56秒という世界記録を樹立します。欧州の著名な飛行家が失敗した難コースでしたが、エンジン、設計、操縦士、全て日本人の手によって成し遂げたのですから日本中大騒ぎになりました。

5月21日、大相撲力士双葉山の第35代横綱昇進が決定。3場所連続全勝優勝。当時は年間2場所、双葉山の連勝記録は昭和14年の69連勝まで続きます。

4月15日、社会事業家・岩橋武夫の要請により、ヘレン・ケラーが初来日。病床にあったサリヴァン

5月29日、豊島区西栗鴨に鉄筋コンクリート3階建ての東京拘留所が落成します。戦後、GHQに接収され、巢鴨プリズンとして多くの戦犯を収容した施設です。跡地には現在、池袋サンシャイビルが建っています。その後、中国での戦火拡大を受けて軍国調のもののが流行し始め、11月には日独伊三国防共協定の調印が行われます。